

## 南魚沼市医療対策推進本部及びタスクフォース合同勉強会 概要

開催日時：令和3年5月17日（月） 17：30～19：00

会 場：本庁舎 大会議室

参加者：市長、副市長、病院部局13人（医師、看護師、コメディカル、事務）、市長部局17人、魚沼基幹病院職員2人、事務局3人

講演：「魚沼医療圏の医療事情 魚沼基幹病院の現状と課題」

講師：魚沼基幹病院 鈴木 榮一 病院長

内容：別紙、資料のとおり

### 【質疑応答、意見交換】

- 我々は、国の地域医療構想のなかでやっていきたいと思っているが、魚沼基幹病院は、今後総合デパート化していくのか。そうすると、当初の構想と異なり、市民病院は生きづらくなっていくのではないか。できれば、病病連携を推進し、魚沼基幹病院には、もっと高度なことをやっていただきたい気持ちがある。  
魚沼基幹病院の今後の方向性、高度急性期・急性期を中心に舵を切っていくのか。市民病院は、地域包括ケアを中心に尖りある急性期と回復期を担い、市民のために魚沼基幹病院と共存共栄を図るのはどうか。  
→開院当時は、急性期医療を担う予定であったが、当時と現在の魚沼地域の医療ニーズがどう変化しているのか、そこを見極めないと将来構想はできない。高度医療、更なる高度医療を目指すのは良いことだが、そこまでの医療をできる病院なのか疑問がある。高度医療の更に高度医療を目指すことは、良いことだが、そういうのはやっぱり大学病院にお願いすべきであり、何でもかんでも担うべきではないが、魚沼医療圏に住まわれている人にとって必要な医療は提供すべきであろうというのが使命である。
- 基幹病院は、県立病院の位置付けであるが、新潟大学の教育機能の教育センターは県の指定管理事業なのか。法人の独自事業なのか。  
→地域医療教育センターの正式名称は、「新潟大学歯学総合病院・魚沼地域医療教育センター」である。あくまでも、大学病院の中央診療施設の一部、一つとして設置されている。大学病院側の組織という考え方である。
- もっとも重要なことは、市民病院、魚沼基幹病院の機能分担、地域の一次医療機関との役割分担について、どのようにしていくのか。人口減とともに、病気も減っていき、その中で高齢化していく。そういった変化に合わせて、病院の在り方を変化させていかなければならないのではないか。

○地域における病院機能の在り方、役割分担について、魚沼基幹病院は高度医療、循環器の充実を求められている。地域の変化に伴った我々自身の変化も必要。市民病院と地域医療に向けたコミュニケーションをしながら、お互いの機能分担について将来を見据えてしていく構想が必要ではないか。

→これからの医療需要を確認していく。医療の種類がどうなっていくのか。その場しのぎではダメ。数年先、10年先を見据えた医療を考えていかないとならない。情報共有ができる場が必要と考える。この地域でここに住んで本当に良かったと言われるようになれば、すごく良いのではないか。

○コロナ禍でなければ魚沼基幹病院に通い、色々な科の医師と顔が見える関係作りができたなら良いなど、思い描いている。

○同じ急性期でも、得意なところの住み分け、得意分野がある。病院と病院、地域にいる医療従事者、人材を有効に生かし、チームとして協力体制、応援体制ができないか。顔が見える関係、お互いを知って、お互い協力できる体制ができないか。魚沼基幹病院にリーダーシップを取ってもらえないか。

→地域に色々な病気を抱えている方がいる。やりたい医療があれば基幹病院に来てもらって手術してもらっても良いし、逆に市民病院へ応援に行っても良いと言っている医師がいる。魚沼医療圏は、医療資源が少ないので、いかに有効活用するか色々な情報交換できればと思う。

○魚沼基幹病院は、当初高度急性期、急性期を担う予定だったが、地域包括ケア病棟で慢性期を担っている。その理由はなぜか。

→病床は足りず、一般病棟を開けるほどの看護師の人員数が足りない。ただ、介護福祉士を入れることによって、地域包括ケア病棟であれば開けるので、苦肉の策として、地域包括ケア病棟を開いたのではないかと思っている。今後の課題である。

→この地域の医療需要がどうなるのか。そういうのを考えた中で、地域包括ケア病棟が必要なのか。急性期だけが必要なのか。回復期も必要なのか。魚沼地域全体でもう一度考えないとならない。禁じ手的に病床をこうしないとならないではなく、これからの医療、将来を考えた中で、魚沼基幹病院がどうあるべきかを考える必要がある。